

## 漫画で家族の支え問う

京都 東山 団士郎さん作品展

立命館大応用人間科  
学研究科教授で漫画家

「家族の物語」を伝えてい  
る。

の団士郎さんの「家族  
漫画展」が8日、京都  
市東山区の東山いきい  
き市民活動センターで  
始まった。子どもとの  
関係に悩んだ末に打開  
策を見いだす親や、終  
戦から過酷な人生を生  
きてきた女性など「家

漫画展は、同研究科  
が東日本大震災の被災  
地で続いている「東日  
本・家族応援プロジェクト」のメイン展示で、  
京都でも知つてもらお  
うと、NPO法人きよ  
うとNPOセンターが  
主催した。

漫画はパネル大で5

(日下田貴政)

が幸せを手にしていく  
暮らいや、虐待を受け  
た子どもが泳げるよう  
になることで自信を獲  
得していくエピソード  
などが紹介される。「家  
族」が持つ支える力を  
問いかける。

漫画展は13日まで。

11日午後1時半から  
は、東日本大震災で関  
西に避難してきた女性  
たちが経験を語るセミ  
ナー「災害のとき家族  
に起ること」がある。  
問い合わせは同センタ  
ー 09075(744)



悩みの原因にも支えにもなる家族をテーマにした漫画  
展(京都市東山区・東山いきいき市民活動センター)

## 東山で経験談聞く集会



原発事故による避難生活について話す古部さん(左)と川崎さん(中央)ら=京都市東山区・東山いきいき市民活動センター

# 放射能なければ家族一緒

## 震災避難の子育て女性、切々と

NPO法人「きょうとNPOセンター」(中京区)の主催で、放射能汚染への恐怖や避難に伴う家族との葛藤が生々しく語られ、参加した市民らが熱心に耳を傾けた。

茨城県北茨城市から伏見区に3人の子どもと移り住んだ川崎安弥子さん(47)は、「受け身では子どもを守れないと思った。でも、夫や友人、思い出の詰まつた自宅から子どもを離すのは苦しかった」と振り返った。中学3年だった長男が昨秋、不登校をきっかけに茨城に帰ったことは「人に何をいわれようと家族は自分で守ると決めた。子どもは「人に何をいわれよ」とも明かし、「放射能さえなければ家族が一緒にいられるのに」と涙ぐんだ。

茨城県から大阪府に長女と避難した古部真由美さん(41)は、「人に何をいわれようと家族は自分で守ることも紹介し、「支える活動を今後も続ける」と決意した。西日本支援情報ニュース」を発行している」と述べる一方、自分の行動が父や親戚から理解されないことへの悩みも打ち明けた。

(高野英明)

東日本大震災から3年7ヶ月となる11日、福島第一原発事故を受けて関西に避難している子育て中の女性から経験談を聞く集会が京都市東山区の東山いきいき市民活動センターで開かれた。

デスク  
日  
本  
語

「戦車と一緒に家屋を引き倒しました」。太平洋戦争末期に京都市内で強制的に行われた「建物疎開」の研究書を夏に記事で紹介したところ、80代の男性が自らの貴重な体験談を寄してくれた。

戦争にまつわる記事を書くと、高齢の読者から手紙や電話をいただく。「懐かしい」「私も同じだつた」。ありがたいなと思う一方、それより若い世代に届いているのか、自信が持てない。

先日、漫画家の団士郎さんの家族をテーマにした作品展を見て、印象に残る物語があった。ある高齢女性の半生。満州で終戦を迎え、貨物列車で逃げる途中で赤ん坊を亡くし、夫の両親のもとで、シベ

## 戦後70年に向けて

リア抑留された夫を待った。やがて夫が帰国し、養女を迎えた後、実の娘にも恵まれ、年老いた今では孫もいる。

団さんは、戦後生まれの世代はそこまで過酷な体験に見舞われるることはなかつたと思い巡らす。ささいなことで大騒ぎするような風潮に対し、「もう少し今に至る自分たちの歴史に目を向けても良いのではないか」と投げかける。

困難な時代を生き抜いてきた人たちの経験を知ることは、私たちの立脚点や価値観を確かめる力になるはず。担当する市民版のメンバーにも「来年の戦後70年を意識した記事を」と呼びかけている。

(報道部 日下田貴政)